

大学での予習・復習を実行できる「学力」を育てよう
—大学では2単位あたり67.5時間の予習・復習が必要—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：すべての大学に適用される大学設置基準が2022年10月に改正されたようですね。

A：はい。大学の1単位あたり、講義を含め45時間、90分15回の2単位の科目なら、講義を含め90時間の「学修」が求められています。

Q：ということは、どういうことですか。

A：(1) 1学期に90分・15回、2単位の科目を基準に考えます。

(2) 授業時間は、「90分×15回＝22.5時間」

(3) その2単位の教科で求められる予習・復習の時間は、「90時間－22.5時間＝67.5時間」

(4) 1回90分の授業につき求められる予習・復習の時間は、「67.5÷15＝4.5時間」となります。

(5) 例えば、1週間に2単位の授業を10教科履修(月～金、毎日平均2教科)の場合、1週間に求められる予習・復習の時間は、「4.5時間×10教科＝45時間」となります。

(6) ①土日の2日間、アルバイトや全く予習しないで週5日間予習・復習すると、「45時間÷5日＝1日9時間」

②日曜だけ休んで週6日間予習・復習すると、「45時間÷6＝1日7.5時間」

③週7日間毎日予習・復習すると「45時間÷7日＝約4.5時間」となります。

○これが、2単位の授業を10教科履修した場合の1週間の予習・復習時間です。

○8教科なら0.8倍、9教科なら0.9倍、11教科なら1.1倍、12教科なら1.2倍が求められる予習・復習の時間となります。

Q：大学生に求めるこの1日の予習・復習の時間は、なぜ必要なのですか。

A：大学は最高学府、最高レベルの学問修得の教育・研究機関ですので、大学教育にふさわしい高度な内容を修得するには、授業前の予習と授業後の復習が必要・不可欠だからだと考えます。大学の質を担保し、厳格な評価を行うためには、授業前の予習と授業後の復習は欠かせないからです。

Q：そのような予習・復習をきちんと行う場合、大学生の1日の生活はどうなりますか。

A：①1日は24時間。

②例えば、1週間に2単位の授業を10教科、月～金まで1日平均2教科履修する場合は、授業時間は「90分×2教科＝1日3時間」と「通学や大学内で過ごす時間」を1日3時間だ

とすると、大学の通学と授業に用いる時間は、「通学など 3 時間 + 授業 3 時間 = 6 時間」となります。

③ 1 日の睡眠時間を 8 時間とすると、1 日 24 時間 - (通学・授業時間 6 時間 + 睡眠時間 8 時間) = 10 時間、10 時間が授業の予習・復習に用いることのできる時間となります。

④ 5 日間予習・復習の場合は、「10 時間 - 9 時間 = 1 時間」

⑤ 6 日間予習・復習の場合は、「10 時間 - 7.5 時間 = 2.5 時間」

⑥ 7 日間予習・復習の場合は、「10 時間 - 6.5 時間 = 3.5 時間」

以上が 1 日 24 時間のうち、睡眠時間(8 時間)、通学・授業(8 時間)、予習・復習(6.5 ~ 9 時間)に用いた場合の残りの生活時間(食事、身支度、トイレ、入浴、休息などの時間)となります。

Q：このような「予習・復習」をしないで、怠って大学の授業に臨むとどうなりますか。

A：(1) 先生が黒板の前で教科内容を説明し、学生が静かに聴講するタイプの従来型の授業でも、テキスト以外に事前に課題が与えられる場合が多いので、予習なしで授業についていくことは難しくなっています。

(2) 最近では、アクティブラーニングが大半の授業で行われていますので、事前に与えられた課題とテキストを十分理解して準備し、自分の考えをまとめて授業に臨まないと、討論型・探究型の授業についていけません。

(3) 毎回の授業について一定の分量のレポートを授業後にメールで提出することを求められる授業も多いので、授業の「復習」は欠かせません。

(4) このように、毎回の授業の「予習」「復習」を怠ると授業についていけないだけでなく、レポートを提出しないと評価の対象となりません。

(5) 学期末の試験で及第点を取るには、普段からコツコツ予習・復習し、レポートを提出すると同時に、試験前に相当準備をすることが求められます。

(6) 予習・復習やレポート提出、試験前の準備を怠ると、単位が取れずに「再履修」「留年」「退学」となりますので、大学生は皆必死で、よく勉強しており、立派と考えます。

Q：大学生になって、例えば週に10教科履修の場合に「1日6.5~9時間もの予習・復習」ができるのでしょうか。

A：(1) 急には無理です。

(2) そこで大切なのは、小学校・中学校・高校時代に、たとえ短時間でも各教科の予習・復習をきちんと行い、「予習・復習の学習習慣」を身に着けることです。

(3) 同時に大切なのは、「予習」「復習」は何のために行うのか、どのように行うのかをよく理解し、納得した上で、自分から進んで行う「自己学習能力」を身に着けることです。

(4) 予習は何のために行うのか。テキストや資料を丁寧に読み、よくわからない語句や内容があったら辞書や参考書、インターネットを用いて調べること。テキストは声を出して音読練習、大切な語句は書き取り練習、数学などの問題はノートに解いてみる。そして、「よくわからないことを明確にする、はっきりさせてから授業に臨む」。これが予習の「目的」です。

(5) 「復習」は何のために行うのか。その日の授業をもう一回振り返るために、テキストや資料、ノートなどを一語一句ゆるがせにしないで読み直す。ノートは授業を思い出し、後で勉強しやすいように整理する。数学などの問題はすべてもう一度やり直す。そして、「その日の授業の理解を深める」。これが「復習の目的」です。

(6) 「予習」や「復習」の「大切さ(価値)」をしっかりと「理解」した上で、自分にとっての「意味」を考え、「意味付け」をした上で、「自覚」をもって毎日しっかりと「予習・復習」を「秩序正しく」実行すれば、必ず素晴らしい成果が出ます。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：教え子の大半が将来大学に進学するのであれば、大学に進学したときに困らないように、「予習・復習」の「価値(大切さ)」とその「意味」を理解させた上で、どう予習・復習を「秩序正しく」行ったらよいか、ご指導ください。

Q：最後に一言どうぞ。

A：僭越ながら、今月も先生方がお読みになれば必ずお役に立つ本をご紹介します。

(1) 1冊目は、英字新聞「JAPAN TIMES」といっしょに配られる「New York Times」をご紹介します。ロシアによるウクライナ侵攻、ハマスによるイスラエル侵攻以来、国際情勢が緊迫度を高め、一瞬も目が離せません。日曜以外毎日配られるこの「New York Times」は、日本の新聞だけでは十分に得られない世界各地、とりわけ今世界で最重要と思われる話題が、世界的に著名なジャーナリストにより署名入りで取り上げられています。辞書を片手にゆっくり読めばわかる内容もありますので、是非、新年から御挑戦ください。

(2) 2冊目は、和辻哲郎著「日本倫理思想史(一)～(四)」(全四冊)岩波文庫、岩波書店 2012年2月16日刊です。

(3) 3冊目は、小西甚一著「日本文藝史 I～V」講談社刊です。国語を教える先生の必読テキストです。

(4) 4冊目は、田中英道著「日本美術全史―世界から見た名作の系譜―」講談社学術文庫、講談社 2012年4月10日刊です。

○ New York Times の本格的な記事を毎日何本か読み、和辻哲郎著「日本倫理思想史」、小西甚一著「日本文藝史」、田中英道著「日本美術全史」などに少しずつでも挑戦することが、学習塾・予備校・私立学校の先生方の資質向上に直結すると確信いたします。